

PICK UP MOVIE

『お隣さんはヒトラー?』

[2022年/イスラエル・ポーランド/英語・独語・スペイン語
・ヘブライ語/96分] G
監督：レオン・ブルドフスキー

© 2022 All rights reserved to 2-Team Productions (2004) Ltd and Film Produkcja

悲嘆や憎しみを消して
心を開くまで

8/23~



1960年、南米のとある町の郊外の一軒家に、孤独な老人ポルスキーが暮らしている。訪れるのは郵便配達ぐらいだが、隣家の空き家にある日ハーツォクと名乗るドイツ人が引っ越してきた。聞こえてくるドイツ語に、ポルスキーは嫌悪感を抑えられない。というのも彼は、ホロコーストで両親・妻・子供たち、すべての家族を失っていたからだ。

苛酷な体験をし、深い悲しみを背負ってしまった人は、それを封印せずには生きていけないのだろう。たぶん持物もすべて失くしたのであろうポルスキーは、必要最低限の簡素な住まいで、淡々と日々を過ごす。心の奥底に秘めた悲嘆が、ふとした行為に滲み出てくる。たとえば庭に植えた黒バラだ。妻が好きだった花なのだ。妻と同じやり方で、ポルスキーは毎日水をやり肥料を施す。

その黒バラをめぐるポルスキーは、毛嫌いしていたハーツォクと言葉を交わす羽目になる。しかもその時、ハーツォクはいつもかけていたサングラスを外していた。その目を見た瞬間、ポルスキーは確信した。彼はヒトラーだ、と。この荒唐無稽さが、かえってポルスキーの苦悩の深さを思わせる。家族を惨殺した者への憎しみが、ポルスキーの行動をやや度外れたものとし、それはコミカルな味さえ漂わせる。

隣にヒトラーが住んでいる。そうポルスキーが力説しても、イスラエル大使館は信用してくれない。ポルスキーは証拠写真を撮るべくカメラを買って自宅二階に設置する。その悪戦苦闘ぶりから、彼がカメラを操るのは、ずっと昔に庭で家族写真を撮って以来ではないかと推測される。あの幸せな日々を奪ったヤツを捕えて処刑しなければ、ポルスキーはヒトラーに関する本を買い込み、ヒトラーの特徴を見つけ出すべく隣人を監視する。

ポルスキーはハーツォクとのつきあいを増やしていく。すべては隣人がヒトラーであることの証拠集めのためだ。だがいくら証拠を突きつけても、イスラエル大使館はまともに取り合わない。ポルスキーの憎しみや怒りは行き場を失ってしまうが、一方でハーツォクは次第にポルスキーに信頼を寄せられるようになっていた。だがそんな矢先、ポルスキーが集めた証拠は、思いもしない形でハーツォクに不運をもたらしてしまう。

ハーツォクが引き立てられて家を去るとき、そろって不機嫌な隣人同士だった二人には、互いに別れを悲しむ感情が生まれていた。戦争というものが、いかに不条理に人々を願わぬ立場にたたせてしまうものか。それによる善悪の線引きなどがいかに曖昧なものか。そんなことをこの作品は静かに語っている。そして、苛酷な体験で心を閉ざしてしまった人も、何かのきっかけで心を開くことはできると、ユーモアを交えつつ励ましているようだ。

プロフィール

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。